



川かわ芹ぜりの花咲く時に逢へりけり

すかんぽも穂に出で初めて紅べに淡し

それにしても、人気がない。そこなる寺の門を
敲たたいても、誰も出てくる気配がない。そうして、
若葉の山に、ただただ山鶯が鳴きとよみ、咲き残
った桜の花が、風のまにまに思い出のごとく散っ
ていた。

道の隈くままで行って見ようと、なお行ゆいて、奥阿
の里に至る。道の辺べに一面に椿が落ちて、草の道
を紅くれないに染めていた。



落ち椿これより奥は草の道

山墓やまはかは花見てけふも暮れぬべし

崩れ家の棟いちはつに鳶尾の三つ五つ

きつと過疎の村なのであろう。それでも、里は
清潔に保たれて小桃源郷とでも言いたいような趣
があった。



一の俣温泉大衆浴場の休憩所

月に九十六歳という長寿を全うして死んだ元春という人の供養のために建てられたらしい。どういう人であったろうか、お地藏さんは飄々とした面持ちで、何も語らない。

もう一つの小さなお地藏さんはいつのものとも知れないが、もう顔も姿もすっかり減って丸坊主のようになっていて。そこへ後から筆で顔を描いてあるのだが、これがほのぼのとした良いお顔をしている。

よくよく見てみると、どうやら右手には赤子を抱き、左手には飯椀を持っておいでのようだ。さては、小さな子どもを亡くした親が、涙を拭って建立したものかもしれない。頸に珊瑚珠の数珠が掛けてあるのも、なにやら奥ゆかしく思われた。

うらら野に子を抱きおはす地藏どの

そこからは一の俣川に沿って北上する。何の当てがあるわけでもない。この川は、蛍の川だ。川床には瑞々しい碧緑の草々が、陽光燦爛たるせせらぎに根を張って、葉末に水滴が輝いていた。白く簇り咲くのは芹である。

